

武庫川臨床教育学会 ニュースレター

2021.11.6 No.11



熱い 二羽報告に共感、「勉強になった」の声

9月4日、援助養成者グループ学習会がオンラインで開催されました。報告・問題提起は二羽礼さん、報告テーマは「保育課程の大学教員としての臨床教育学的あり様の模索」でした。現場での保育士の経験をどう生かすか、保育士養成の大学教員としての実践的な悩み、学生によりそいつつ未来の保育士をめざしてもらうための理論・実践の蓄積をどうするのか、具体的で真摯な報告に多くの共感がありました。

以下、参加者の発言要旨です。

- 思いの深さを（Aさん）

二羽さんの思いの深さを感じました。15回の授業でどれだけ伝わるのか。学生は面白い。しんどい子の思いがよくわかる教師になってほしい。しかし現場ではどうなのか、しんどい思いをしているのではないかと。

自分自身の大学授業実践についても考えました。学生は現場のことを知りたいと思っている。「実習は楽しみや。教師も色々いるよ。」と語っている。それを大事にしたい。小学校で取り残していたものが大学まで尾を引いているように思う。大学でじっくり考えるゆとりがほしい。

- 学生の奥に子どもが（Bさん）

修士で学んでいます。保育実習が研究分野です。専門学校に勤務しており、いつまでもとまどっている。コロナ禍の実習。学生の「日誌のお直しが無い、困ってないよ」こうした行動の思い、意味は何かと考えています。20才のある男性学生は学校の近くで実習をした。そこまで援助する必要があるのかと思いつつ、やりすぎがよかったのか否か振り返っている。つなげられたらよかったのではないかと考えています。連携は大事だけど、これが難しい。どこまでできるのかと、いつも悩む。支援される側、距離感の持ち方の難しさなど、模索している。学生の姿の奥に子どもの姿がある。「やる気がないのは子どもに失礼」「資格をとるなら子どもと真摯に向き合う」など、共感しました。

武庫川臨床教育学会

<http://mukogawarinkyo.com/>

〒663-8558

兵庫県西宮市池開町 6-46

武庫川女子大学教育研究所内

電話番号：0798(45)9866

メール：mukogawarinkyo@yahoo.co.jp

- 心に染みます (Cさん)

専門学校の養成現場にいました。二羽報告、身に染みます、よくわかります。私は、まだ板についていないだけに学生が「先生しっかり」などと突っ込んできます。異年齢が学び合う現場であるため、面白さはあります。寝ている子は起こすのではなく、バックグラウンドをさぐります。さまざまな背景を抱えつつも、その中で資格をつけてもらえればと思っています。実習の厳しさを伝えることと学生を受け入れることの統一、難しいが、よくわかります。

- 悩み続けています (Dさん)

保育現場 20 年、養成で 18 年を経験した。今も悩みつづけています。学生に対する視点として、保育という仕事の質が理解されておらず、とにかく資格を取ることだけが考えられているように感じる。学生自身、自分が見えていないのでは。しかし、大学は大きく変わる時期、保育者になる以前に自分を見つけ、考える 4 年間にしてほしい。受け入れることについては、人として受け入れるが、実習の原則は何かという理解はしてほしい。悩みながらではあるが、そう思う。どういう立場で関わるのか模索しつつ、学生に伝えながら、接しているところです。

- 変革の主体は学生自身に (Eさん)

一緒に職場で働きながら、配慮ある振る舞いに感心しています。学生にとっては、よいおとなとのふれあいが大切です。手をさしのべる具合をどうするか、いつも考えますが、学生の自主性を重視し、自己教育ができる人と思ひ、私も実践しています。ただ、以前よりも手を差し伸べる度合いを下げました。今は、積極的に待つことを大切にしたい。授業の中での問いを自分なりに考え、考える人としての保育士になってほしい。教員としては、学生が学ぶうえでの最善の利益を追究したい。学生の自己の育ちを考えると、変革の主体は学生自身にあるのではないかと思う。話さなくても内面の思い、葛藤が伝わってくる学生がいる。今後も追求していきたい。

※ 次回の 3 つの学習会の計画は検討中です。HP やニュースレターを通して、随時お知らせします。

第 16 回 武庫川臨床教育学会研究大会の構想 (第 1 次)

2022 年 2 月 20 日または 27 日で調整中 @武庫川女子大学 (対面・オンラインのハイブリッド型開催)

- ◆自由研究発表

- ◆シンポジウム (『臨床教育論集』第 14 号を見通して)

テーマ (案) 「コロナ禍の今と臨床教育学 (仮題) 」

例えば、村越報告 (「表現と教育」に関する論文から)、渡邊報告 (日本臨床教育学会シンポ提起から) と、2 本の問題提起をしてもらい、木田編集長に進行をお願いする。パネラーとして編集委員から 3 名が登壇し、討論に参加してはどうか。具体的事例を提示しながら公開カンファレンスのようにし、参加者と考えあえる場にしてはどうか。臨床教育学会らしい研究会を企画してはどうか。このような意見が、第 1 次案として交流されました。

- ◆記念講演

田中昌弥氏 (都留文科大学、日本臨床教育学会副会長) ※ 打診中

※ 10 月理事会・事務局会議で上記のような案を考えました。11 月の理事会・事務局会議で開催日・内容の最終決定をし、12 月中に会員のみなさんに大会要項や自由研究発表の案内をお知らせする予定です。

自主ゼミ学習会の案内

毎週第 2 土曜日、夕方 5 時から ZOOM で開催しています。基本は武庫川女子大学上田研究室で行いますが、最近ではオンラインで実施しています。どなたでも参加できます。テキストは、徳永進『どちらであっても一臨床は反対言葉の群生地』(岩波書店) です。参加希望の方は事務局までお問い合わせください。

シリーズ：私と臨床教育学⑨

「臨床」を「個人のための」と置き換える

渡邊 由之（東大阪大学）

臨床教育学は、今では私の生活と研究と仕事の中心に位置していますので、整理された文章にならない心配がしますが、ここではそれらを通して今感じ考えていることを、綴らせてもらいます。

「臨床とは何か」 武庫川臨床教育学会でも、日本臨床教育学会でも、この根本的な問いが設立当初から屹立し続けているように思います。そして、それぞれが自身の実践と研究と生活を通じた「こたえ」を見出しながら、それを共有し、討議し、学びを深めてきたようにも思います。

私が臨床教育学と出会ったのは、山梨県の都留文科大学でした。学部時代、学ぶ姿勢に問題のあった私は、自分を新たに見つめ直すかのように受験勉強をし、同大学の専攻科と大学院を受験しました。そして進学した大学院の専攻が「臨床教育実践学専攻」でした。学部の卒業論文で触れた、岐阜県恵那地域の生活綴方教師であった丹羽徳子先生に関心があり、その先行研究者である田中孝彦先生のもとで修士論文を書きました。このように書くと、田中孝彦先生から臨床教育学を学んだようにも聞こえるかもしれませんが、いま思い返すと、田中ゼミから臨床教育学を学んだように思います。現職教員から語られる子ども一人ひとりへの視点を重視する具体的な話、それに触発されながら職場経験のないストレートマスターが持論や考えを投げかける。それらの論議を聴きながら、田中先生がさらに質問を投げかけたり、発言者の源を掘り下げたりする。個への関心という地盤のもとで展開するゼミでの討議、そのあり方が、私にとっての臨床教育学の出会い、つまり個を徹底的に大事にする学問との出会いでした。同時に、研究対象であった丹羽徳子先生の生活綴方教育実践もまた、そのように個を重視する実践思想がありました。それからというもの、私は臨床教育学の「臨床」とは「個人のための」を意味するものとして認識してきたように思います。

生活・暮らし・人生への関心 もうひとつ、臨床教育学について考えはじめると思い浮かぶことがあります。それは、生活や暮らしについてです。臨床教育学を自分の専門として意識するようになってから、それ以前よりも「生活」や「暮らし」へ関心が向くようになりました。生活綴方教育を学んだことは、決定的であったと言えますが、この学会や関連学会で交わされる実践や研究からも刺激を受けたことは確かです。

誰にも生活があり、暮らしがある。それは見ようとしなければ見えないが、ただ見ようとしても見えないものである。その存在を察しながら他者に関わるのと、そうでないのでは大きな違いがある。公的な空間に私的な都合を持ち出すことがよしとされにくい世の中で、教育界だけはそのようになってしまっはいけない。そのようなことを、被教育者としての体験も踏まえながら、考えるようになりました。

臨床教育学を学ぶなかで生活・暮らしへの関心が高まったことは、この学問自体がそれらにまなざしを向けさせる何かを持っているからだと思います。個人を重視する学問は、個人の暮らしぶりへとまなざしを向ける必要があります。それを教育現場で実践するならば、必然的に子ども・若者の生活や生活史に関心を置きながら、かれらを生活の主体とみなし、そのうえで一人ひとりとの関わりを見出すこととなります。難しいことですが、教育活動は子どもと教師の人生の交差点でもあります。岐路に立つ子ども・若者にどう関わるか、それが難しくないはずがありません。その困難さを引き受け、共有し、普遍を見出そうとする学問が、臨床教育学なのでしょう。

日常の風景がしめす臨床像 ここで横道に逸れますが、コロナ禍に見舞われてから、運動不足が気になるようになりました。今のスマートフォンは、持ち主の歩数を勝手に計るものがあり、その記録をたまに見ると、一日に1千歩程度の日がちらほらあります。その詳細を示すタブを開くと、移動距離が1キロ程度との記載。これはまずいと思い、時間を見つけて歩くようにしました。子どもの保育所の送り迎えや、そのついでに遠回りをして自

宅に戻ったり、すぐ近くのコンビニではなく次に近いコンビニまで行ってみたり、休日は自宅近くの商店街を歩き回ったり、大学内を走って移動してみたり（廊下以外）、そんなことをしています。

歩いてみると、いろいろな風景が眼に入ってきます。コロナ禍で営業を自粛していた店が再開させたこと。その入り口が換気のために開けられており、客たちの表情が見えたりもします。密ではないかと思いつつも、人びとが対話する様子は人間らしさの再来を感じさせます。眼を道に向けてみると、落ちていたマスクの多さに気がつきます。また、道に停めた車内で食事をする人もよく見かけます（以前からそうしていた人かもしれませんが）。夕方から夜まで子どもを預かる放課後支援の場が、1キロ圏内に3～4件あります。そうした風景は、時代を映す鏡のようです。行き交う人も様々です。仕事前に一服しながら新聞を読む人、猛スピードで子どもを乗せた自転車をこぐ人、人目を気にしながらマスクをずらし呼吸を整える人、喫煙所の前を早足で過ぎ去る人、公園で談話を愉しむ高齢者たち、弾けるように遊ぶ子どもたち。こうした風景・人物を見ていると、自然に頭が考えることをはじめます。「今日の前にある群像」という臨床像が、ものを考えさせます。部屋に閉じこもり画面と向き合う考え方でなく、人びとの気配を感じながら考えるほうが、臨床のつく学問には向いているようです。

学生を「診る」日々の不確かさ 人の息づかいや存在さえも遠ざかってしまったコロナ禍において、教育や教育学は何に警戒し、何に気をつけておくべきか。そう考えたとき、やはり自分が接する人びとの近くでものを考えることができにくい状況に警戒し、それができているかどうか気をつけておくことではないか、と思います。

コロナ禍のことで考えることは多いのですが、私の場合、マスクを付けた学生の表情はもちろん、そのまなざしをよく見るようになりました。見るというよりも「診る」と言った方がよいかもしれません。このところ、学生のまなざしの奥にある感情を診察するように診てしまいます。その診断の元で、自分の実践を方向付けますが、それが正しいのかどうか分かりません。先日も、1年生の必修科目において学習方法を少し変更しました。「他者の意見と自分の意見を突き合わせる」ことをテーマとし、同級生の意見を聴きあうように考えていましたが、それをやめ、本に書かれた他者の言葉と向き合うようにと変えました。かれらが同級生の声を聴きあうイメージが描けなかったからです。同時に、毎回提出を求めている小レポートの書き言葉が乱れているようにも思ったからです。

仮説生成が多く、確証が得られないままでは、気持ちの悪さも付きまといますが、いま教職に就いている人びとはこのような感覚を大なり小なり抱いているのではないのでしょうか。臨床教育学は、個の実感と語りに意味を見出す学問です。コロナ禍を皆一様に経験しているようでも、実は個々に異なる経験を積んでいます。今はそれを共有する必要があると思います。「臨床の語り」を重ねることの大切さを、今、歩きながら考えています。

原稿募集のお願い（『臨床教育学論集』編集委員会より）

「コロナ後の世界を、ともに生きるために（仮題）」という企画を構想しています。職場での実践だけでなく、日常の生活であったことの中で、とりわけあなたにとって印象深い事柄について書いてください。字数は600字～800字です。原稿は事務局までメールでお送りください。よろしくお願いいたします。

編集後記

▶年間計画で決定した3つの小さな学習会が好評です。今回は援助・養成グループの学習会と参加者の感想を特集としました。今後、参加者をどう広げていくかを考えていきたいと思っています。▶第16回大会の第1次構想を掲載しました。会員のみなさんの意見もお聞きしながら内容を検討していきたいと思っています。▶毎回好評の「臨床教育学と私」が来年の臨床教育学論集14号に再録されることになりました。今回の渡邊報告も含めてじっくり読み味わいたいです。▶臨床教育学では当事者の声を聴くことが不可欠です。新首相の岸田総理は「私の特技は人の話をきくことです」と豪語していましたが、さて総選挙の結果は。（文責：吉益）